

英語学研究室/中島崇法(助教)

英語学について

英語を研究するとは

この研究室は、「英語学」すなわち英語の学問的研究を目指す研究室です。しかし、「英語を研究する」と言われて皆さんは何を想像するでしょうか。英語については多くのことが分かっており、研究をして新しいことを明らかにする余地などないのではないか、と思う方も少なくないのではないのでしょうか。

しかし、ひとたび英語の事実をつぶさに観察してみれば、実は不思議でよくわからない性質にあふれていることがわかります。例えば、一般動詞を使った文を否定文にする場合には助動詞doが用いられます。

- (1) a. Mary likes English. (ジョンは英語が好きだ)
b. Mary does not like English. (ジョンは英語が好きでない)

一方で、be動詞を用いる場合には助動詞doが用いられません。

- (2) a. John is a linguist. (ジョンは言語学者だ)
b. John is not a linguist. (ジョンは言語学者ではない)

仮に(3)のようにdoをbe動詞と一緒に用いると、英語としておかしい文になります(文の前に置かれるアスタリスクマークは、その表現が母語話者にとって違和感のある表現であることを意味します)。

- (3)*John does not be a linguist.

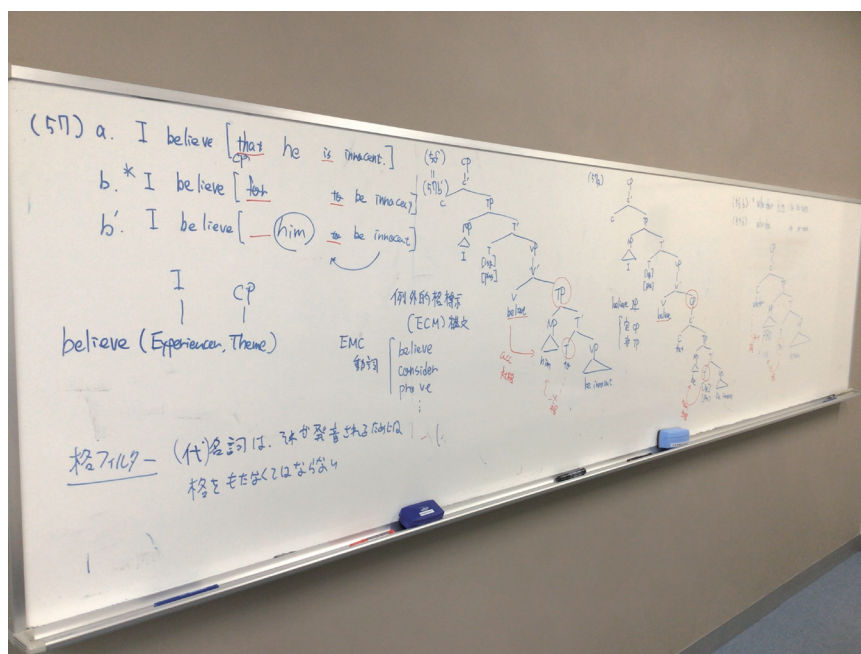
こうした「助動詞のdoはbe動詞と一緒に使ってはならない」という事実は、英語を学んだ経験がある人であれば誰もが知る事実です。しかし「なぜ」助動詞のdoはbe動詞と一緒に使ってはならないのでしょうか。「それはそういうルールだ」という態度を取らずにこの事実を真面目に説明しようとする、とたんにわからなくなるのではないのでしょうか。

ちなみに、命令文の場合には、

- (4) Don't be shy! (恥ずかしがらないで)

のように、助動詞doとbe動詞と一緒に用いることができます。つまり「助動詞のdoはbe動詞と一緒に使ってはならない」というルールには例外があります。そうすると、「なぜ」そのルールが命令文においてはあてはまらないのかも説明する必要があります。

このように、一見当たり前のように思われてきた、もしくは「それはそういうものだ」として不問にされてきた事実を改めて捉えなおし、「なぜ」を客観的に説明することが英語学の目標の一つです。



Ⅰ 生成文法理論

この研究室では、英語にみられる様々な性質を生成文法(generative grammar)という理論に基づいて説明します。生成文法理論は言語学者ノーム・チョムスキー(Noam Chomsky)によって提唱された言語理論です。この理論は、ヒトの言語能力をヒトという生物が備えている認知能力の一種として捉えたうえで、(Ⅰ)子どもはどのようにして言語を身につけるのか(Ⅱ)そのようにして身についた大人の言語にはどのような性質が備わっているかといった問題を明らかにしようとしています。また近年では、(Ⅲ)言語能力は生物進化の過程でどのようにヒトという種に備わったのかという問題の解明にも挑戦しています。

この生成文法理論に基づいて英語学を学ぶ利点のひとつは、英語を始めとする言語のさまざまな性質について客観的かつすっきりとした見通しを得ることができる点にあります。生成文法理論は、英語などの言語の個別の特徴を調べて記述するだけでなく、「なぜ」そのような特徴がその言語に備わっているかを客観的に説明します。そのさい、一見互いに無関係に思われているような諸構文が共通してもつ性質を明らかにし、統一的な説明を与えます。このような視点で言語の性質を学ぶことは、「なぜ」という視点から英語という言語を深く理解することに繋がります。そしてこのような深い認識を育むことは、英語使用者として熟達したり、英語を他者に教える上でも大きな意味があるはずです。



I 教員の研究について

私は、生成文法の最新理論である極小主義統辞論の枠組みを用いて、以下2つのテーマについて研究をしています。

①: 英語の付加構造の研究

②: 英語の転置現象の研究

テーマ①: 英語の付加構造の研究

まず、付加構造とは文構造のうち必ずしも必要とされない要素をいいます。例えば(5)において、斜体で表した要素が付加構造(付加詞)です。

(5) a. The student carefully examined the data in that room.

(その学生はその部屋で慎重にデータを調べた)

b. The student gave the ticket to her friend before the train arrived.

(その学生は、電車が来る前にチケットを彼女の友達に渡した)

これらは、examine「調べる」give「与える」といった動詞が表す事態を表現するうえで必ずしも必要とされる要素ではありません。例えば、斜体の要素を脱落させて

(6) a. The student examined the data. (その学生はデータを調べた)

b. The student gave the ticket to her friend.

(その学生はチケットを彼女の友達に渡した)

と表現しても文法的にまったく問題ない文となります。しかし、下線部の要素を脱落させるとたちまちおかしい文になります(ちなみに、このような動詞が表す事態を表現するうえで必須の要素を「項」といいます)。

付加構造は文構造にとって必須の要素ではないにもかかわらず、英語を始めとする人間の言語には広く見られます。ではそもそもなぜ、必ずしもいらない要素が人間言語には備わっているのでしょうか。私はこの謎を、英語の付加構造のさまざまな性質を手がかりに研究しています。

テーマ②: 英語の転置現象の研究

転置現象とは、文中のある要素が本来の語順とは異なる位置に出現する現象をいいます。たとえば、(7a)の平叙文の斜体部を尋ねる疑問文(つまりBillが尊敬している人物は誰かを尋ねる疑問文)を作ると、(7b)のようになります。

(7) a. Bill admires Mary. (ビルはメアリを尊敬している)

b. Who does Bill admire? (ビルは誰を尊敬しているの?)

興味深いことに、(7b)ではadmireの目的語に対応する箇所が欠落しており、代わりに文頭のwhoがadmireの目的語の役割を果たしています(すなわち、whoはBillが尊敬する人物を指し示します)。このように、英語では目的語は通常(6a)のように動詞の直後に置かれるはずですが、WH疑問文などの一定の環境では本来出てくる位置ではない場所((6b)の場合、文頭)に出現することがあります。

このような現象は、他の構文にも見られます。例えば(8b)の感嘆文は、(8a)の目的語strange clothesをwhat strange clothesに変えることで得られますが、このときwearsの目的語に対応する箇所が欠落し、代わりに文頭のwhat strange clothesがwearsの目的語の役割を果たしています。

(8) a. Bill wears strange clothes. (ビルは奇妙な服を着ている)

b. What strange clothes Bill wears!

(なんと奇妙な服をビルは着ているのだろう)

こうした、文中のある要素が本来の語順とは異なる位置に出現する現象は英語のみならず様々な言語にも見受けられます。では、なぜ人間言語にはこのような転置と呼ばれる性質が備わっているのでしょうか。また、転置が用いられる条件・用いられない条件はあるのでしょうか。もしそのような条件があるのであれば、なぜそうした条件があるのでしょうか。私はこの謎を、英語のさまざまな転置現象を調べることで明らかにしようとしています。

ゼミナールについて

このゼミでは、英語学の専門書・学術論文の講読、口頭レポート、研究発表、卒業論文の執筆などをつうじて、次のことを目指します。

- 英語学(特に、生成文法理論にもとづく統辞論およびその関連領域)における専門的知識を身につけ、英語をはじめとする人間言語への理解を深める。
- 研究を遂行・完成させるために必要な技術(先行研究を収集整理すること・関連文献を正確に読むこと・論点を指摘し考察を加えること・研究成果を発表することなど)を身に付ける。

3年次には、英語学の基本文献を講読し、英語で書かれた専門書や専門論文を読むための基礎固めをします。また、卒業論文のテーマ選びに繋がる文献を講読します。4年次には、3年次に学習した内容をふまえ、卒業論文のテーマにかかわる論点を調査し、口頭発表します。また、卒業論文完成のための指導をおこないます。

このゼミで学ぶ生成文法理論は、英語などの言語の個別的特徴を調べて記述するだけでなく、「なぜ」そのような特徴が言語に備わっているかを客観的に説明することを目指す理論です。ゼミでの学びを通じて「なぜ」を常に問い、論理的・客観的に答えを出す姿勢・方法論をぜひ身につけてください。そのお手伝いをしたいと考えています。